

口永良部島

福岡管区気象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方気象台

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いています。新岳火口から半径約1kmの範囲に噴石を飛散させる程度の小規模な噴火が発生すると予想されますので、これらの地域では噴火に対する警戒が必要です。

平成19年12月1日に火口周辺警報(噴火警戒レベル2、火口周辺規制)を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

12月の活動概況

・噴煙活動

新岳・古岳の噴気は観測されませんでした。

・地震、微動活動(図2、図3)

火山性地震は消長を繰り返しながら、やや多い状態が続いており、月回数は111回(11月:127回)でした。火山性地震の震源は、新岳火口直下のごく浅い所に分布しました。火山性微動は、2006年10月から消長を繰り返しながらやや多い状態が続いており、月回数は2回(11月:4回)でした。

・地殻変動(図1、図4)

GPS連続観測では、火山活動に起因するとみられる変化は観測されませんでした。

・上空からの観測(図5)

6日に海上自衛隊鹿屋航空基地救難飛行隊の協力を得て上空からの観測を実施しました。火口周辺及び噴気地帯周辺の状況に大きな変化はありませんでした。

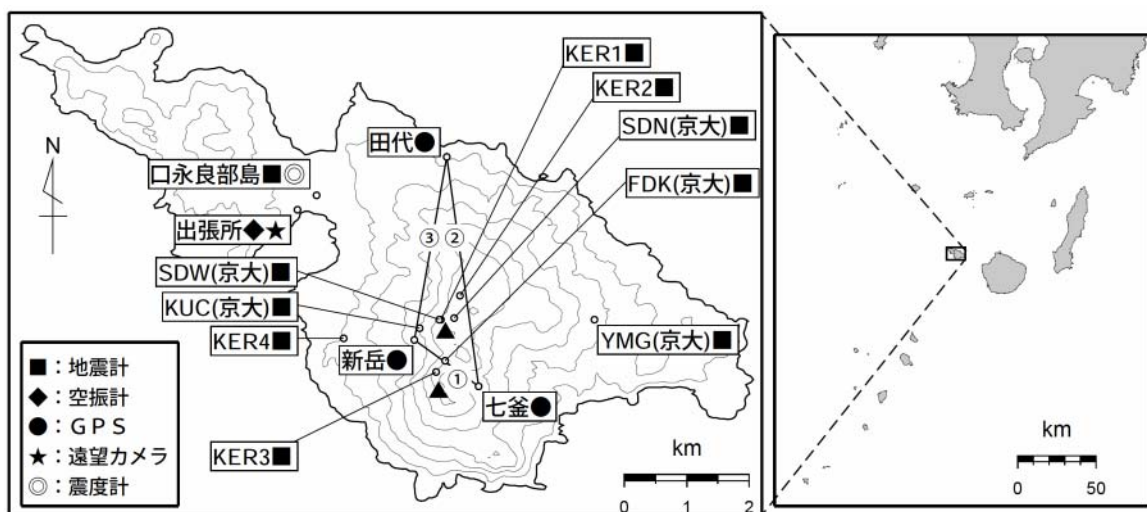


図1 口永良部島 観測点配置図

この資料の作成に当たっては、気象庁のデータ他、京都大学のデータも利用して作成しています。地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用しました(承認番号:平17総使、第503号)。

この火山活動解説資料は、気象庁ホームページ(<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>)、福岡管区気象台ホームページ(<http://www.fukuoka-jma.go.jp/>)でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料(平成20年1月分)は平成20年2月7日に公表予定です。

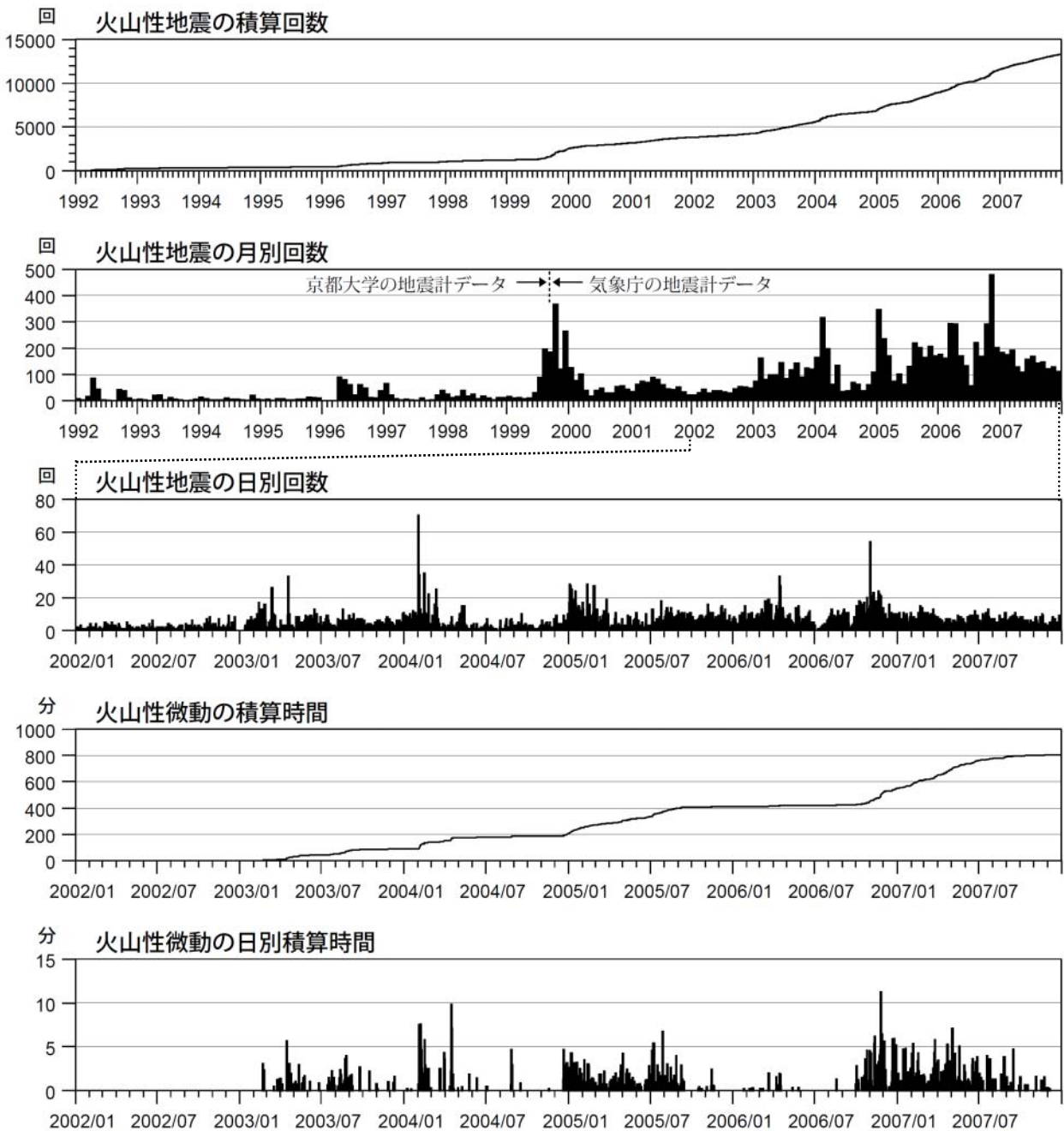


図2 口永良部島 火山性地震・微動活動経過図(1992年1月1日～2007年12月31日)
 ・2005年1月以降、火山性地震は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いています。
 ・火山性微動は2003年2月から時々観測され、2006年10月以降消長を繰り返しながら、やや多い状態で推移しています。

* 1992年1月1日～1999年9月12日及び2005年12月15～28日間は京都大学のデータを使用しました。

* 2002年12月22日～2003年1月11日まで地震計1の機器障害のため欠測しました。また、2005年7月9日～9月18日、2005年11月5日～12月14日までは地震計1の機器障害のため、地震計3で回数を計数しました。

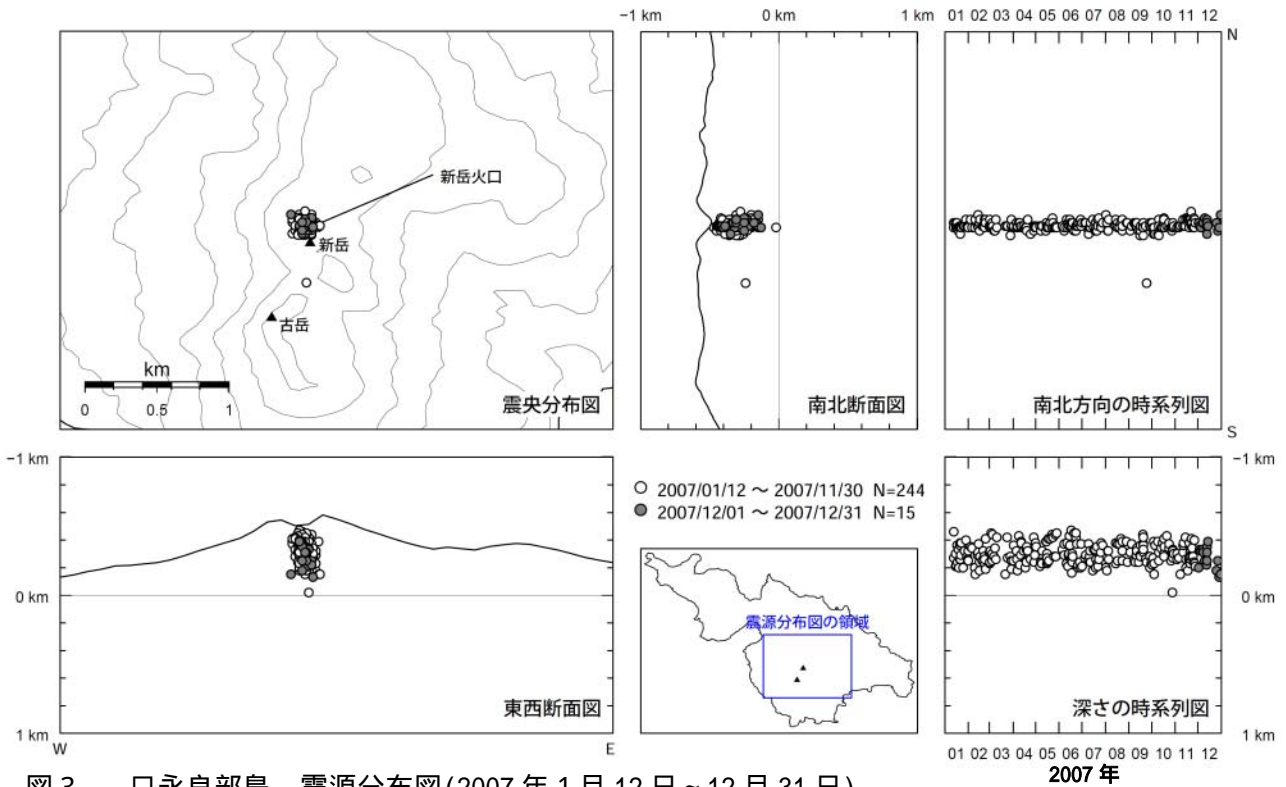


図3 口永良部島 震源分布図(2007年1月12日~12月31日)
 火山性地震の震源は、新岳火口直下のごく浅い所に分布しました。
 * 1月12日から京都大学のデータを用いて震源を求めています。

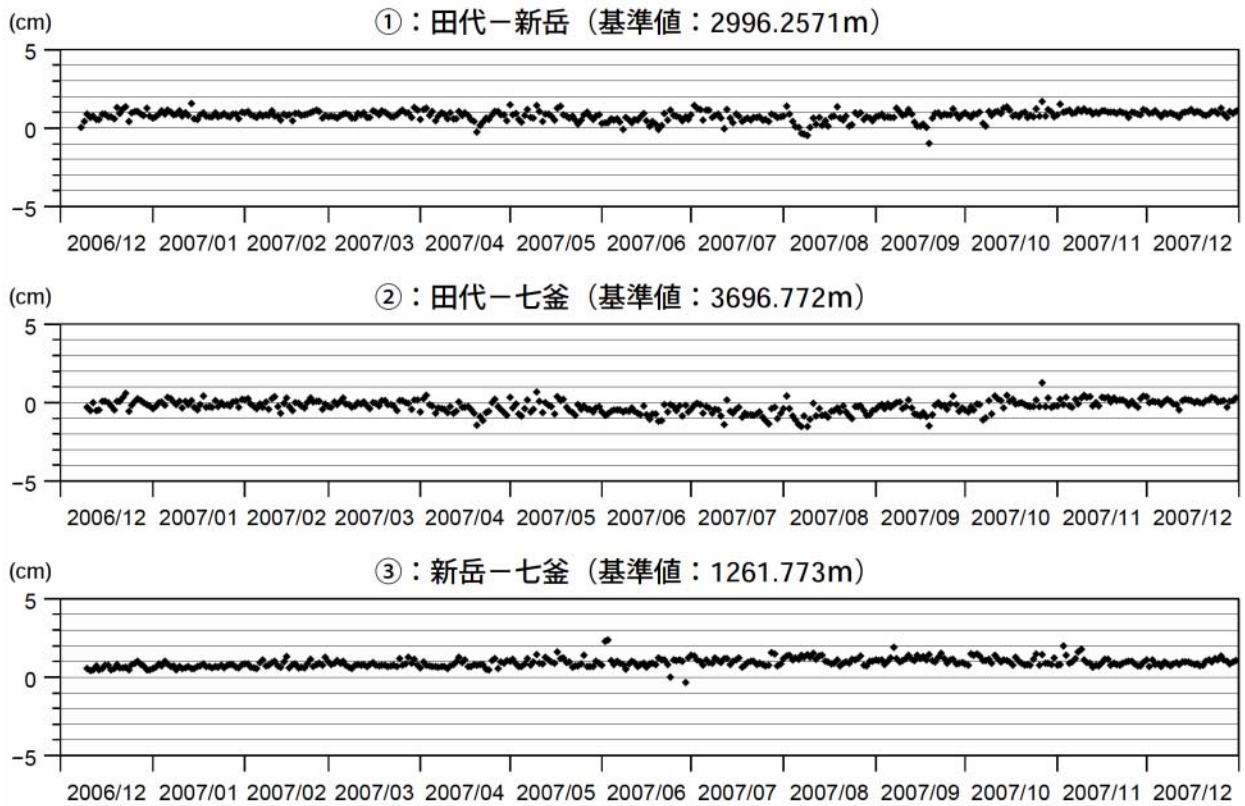


図4 口永良部島 GPS連続観測による基線長変化(2006年12月8日~2007年12月31日)
 火山活動に起因するとみられる変化はありませんでした。
 この基線は図1の ~ に対応しています。



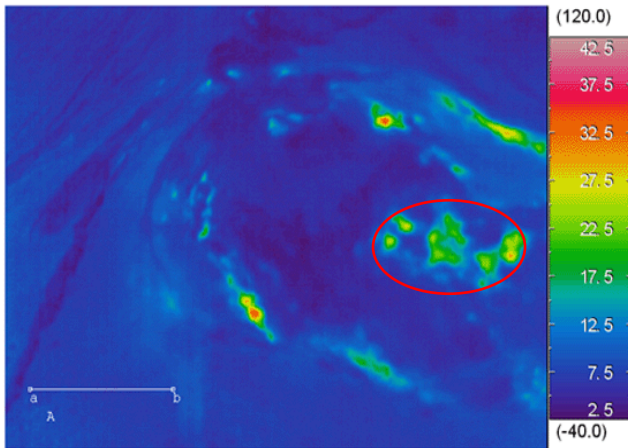
・新岳火口 内は主な火口内熱域
2007年12月6日(北側から撮影)



・新岳火口 内は主な火口内熱域
2006年12月1日(北側から撮影)

RG: 1 8: 0. 80 SC: NORM

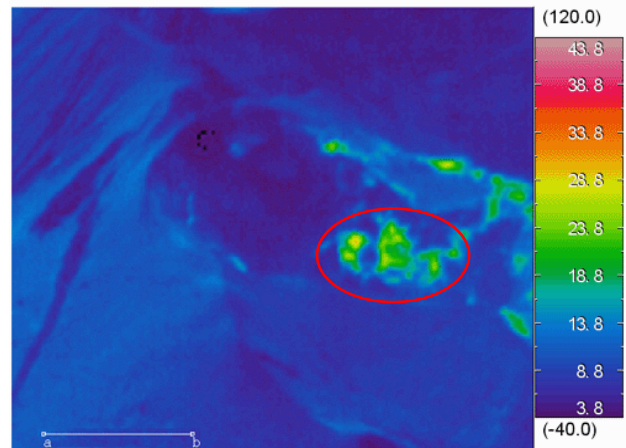
07/12/06
11:21:08



・新岳火口 内は主な火口内熱域
熱映像 2007年12月6日(北側から撮影)

RG: 1 8: 1. 00 SC: NORM

06/12/01
10:58:38



・新岳火口 内は主な火口内熱域
熱映像 2006年12月1日(北側から撮影)

図5 口永良部島 上空からの観測結果 12月6日撮影

- ・赤外熱映像装置¹⁾による表面温度分布に特段の変化はありませんでした。

1) 赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所を測定することが出来る利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。